

三河別院の

あゆみ

三河別院は、真宗大谷派（東本願寺）の三河地域の別院です。

三河地域は宗祖親鸞聖人とのゆかり深く、蓮如上人の熱心な説法により早くから大きな真宗門徒の勢力を築いた地です。三河別院は長い歳月の中を門徒とともに生き、その役割と使命を果たしてきました。



◆「御坊」から「別院」へ

江戸時代、地方の門徒のお世話をする真宗大谷派の拠点として、「御坊（ごぼう）」がありました。御坊とは、十七世紀以後、本山に準ずる格式として設けられた寺院で、明治時代になると、「御坊」の名称は「別院」と改められ、それが今日に至っています。

やがて十八世紀の後半、海上交通の要路でもあった西三河南端、赤羽に赤羽御坊が建立されます。しかし、天明八年（一七八八）に本山が焼失したため、その支援をおこなう三河の拠点として東海道沿いの暮戸に会所が設置されました。以後、この暮戸が西三河の中心的な拠点となっていくます。

明治になり、本山両堂再建のために赤羽別院と暮戸説教場（会所改め）を岡崎に移し、三河別院とするという通達が、厳如（ごんによ）上人御議職前日の明治二十二年（一八八九）十月六日に出されます。しかし、地元門徒が存続を願い出たため、赤羽と暮戸からの移転は取り止めとなります。その代わりに、丹後峯山別院の本尊を移して三河別院となし、明治二十三年（一八九〇）四月八日、御入仏法要が厳修されました。

その後、数々の変遷を経ながらも、三河別院は当地随一の念仏道場として、僧侶門徒の育成や教学振興、幼児教育、布教伝道活動などに大きな役割を果たしてきました。



◆ひらかれた別院として、地域とともに

第二次大戦中、本堂が焼失。再建と境内地の整備が完了したのは、昭和六十三年（一九八八）のことです。その感謝法要の厳修を機に、とくに、①別院の年中行事の手引きをつくり、法要儀式、荘厳などが寺院の法要儀式荘厳教化の参考になることを期すこと。（儀式の執行の面）②寺族子弟の声明および諸作法習得の場として研修生制度を設けるとともに、門徒の方々への声明指導並びに寺院の法要儀式の助勢を行うこと。（僧侶および門徒の教化育成の面）、の二点に力を注いできました。また「ひらかれた別院」を願い、夏の盆踊り大会や講演会、各種展覧会等を定期的にひらき、地域社会に密着した交流活動を図りながら、次代に求められる別院像を模索してきました。

今後は、二〇〇七年四月に行われた「蓮如上人五百回御遠忌法要」を縁として、三河地域の寺院門徒の教化の中心地となる別院をめざし、歩みを進めてまいります。

（三河別院蓮如上人五百回御遠忌法要記念誌より抜粋）



【別院の略年表】

- 二三五年（嘉禎三年） 親鸞聖人、関東より帰洛の途中、三河・矢作柳堂で教化
- 一四六八年（応仁二年） 蓮如上人、三河巡化
- 一七八八年（天明八年） 本山（東本願寺）焼失
- 一八九〇年（明治二十三年） 厳如上人の通達により丹後峯山別院を三河国岡崎に移し、三河別院と改称、入仏法要
- 一九〇九年（明治四十二年） 本山旧大師堂の下附を受け、本堂入仏法要
- 一九二五年（大正十四年） 燕岡幼稚園（現燕ヶ丘保育園）創設
- 一九四五年（昭和二十年） 太平洋戦争においての空襲により伽藍の大半を焼失
- 一九六五年（昭和四十二年） 本堂上棟式、復興永代経
- 一九七〇年（昭和四十五年） 本堂入仏法要（現在の本堂）
- 一九八八年（昭和六十二年） 三河別院開創百年、親鸞聖人七百回御遠忌法要、庫裡・書院・土塀等新築
- 一九九五年（平成七年） 蓮如上人五百回忌お持ち受け法要、立教開宗七百五十年慶讃法要、宗祖厨子修復、東別院会館新築
- 二〇〇七年（平成十九年） 三河別院蓮如上人五百回御遠忌法要厳修

